［課題］

第１回課題　（1500 字～2000 字）
以下の２つの課題の中からいずれかを選んでレポートを作成して下さい。
①　人間にとってなぜ宗教が必要なのかについて述べなさい。

［本文］

世界には様々な伝統がある。その中でも特に，霊，神，救い，悟り，来世，奇跡といった，合理的にはなかなか捉えられないものについて語る文化的伝統のことを，大雑把に宗教と呼んでいる。そして，伝統的な宗教は，神話や儀礼，呪術，戒律，教典といったものを持っている。「タブー，聖俗」という概念を用いて，豚肉は雑菌が多いので口にしてはいけないとか，お供物をつまみ食いしたらバチが当たるとかなど，医学的・倫理的見地からの規範という側面がある。[1]

もう一つの側面は「なぜ生まれてきたのか」「何のために生きるのか」「死んだらどうなるのか」という形而上的な人生の意味に対する疑問である。そうした疑問について悩んでも，親や兄弟，友人は明確な答えを持ち合わせていない。そのため，現実世界を超越した存在である仏教の輪廻転生や極楽浄土，キリスト教の天国と地獄などの思想にすがるようになった。死んだあとに魂がどこへ行ってどうなるかを示してくれるからだ。[2]

約７年かけて約４万キロを歩く荒行「千日回峰行」を２度成し遂げた比叡山飯室不動堂長寿院住職の酒井雄哉は，生まれてくる意味や死後の世界について次のように語る。[3]

> 生まれてきた意味，それはこの壮大な宇宙の中で，地球という星に誕生させていただいて，仏様からお前ちょっと世の中のためになにかいいことしてきなさいと放り込まれたんじゃないかと思うんですよ。命と引き換えに，仏様はぼくたちに命を授けてくれたのですから，命をいただいたぼくたちは，生まれてからの生涯の論文を最後まで書かなくてはいけないんですよ。仏様はどういう論文を書いてくるのかを，天上の世界で見ていると思いますよ。

人智を超えた仏の示している答えなので，人間の煩悩を吹きとばす，有無を言わさない強制力がある。さらに，映画監督の森達也はオウム真理教を題材とした映画を制作した経験から次のように語る。[4]

> 世界には様々な宗教・宗派があるが，共通することは，人が死んだあとの魂の行く場所，つまり死後の世界を示してくれることだ。そしてこれを導いてくれるのが神様だ。これは宗教の一つの本質，神様がいることを信じられる人は，死の恐怖を和らげることができる。死はひとつの通過点なのだと思うことができる。だから与えられたこの生を，迷うことなく過ごすことができる。

今から10年ほど前に，君塚良一が脚本・監督を担当した『遺体　明日への１０日間』という東日本大震災直後の何百もの遺体が運び込まれた小学校の体育館を舞台にした映画を観たことがある。遺体を前にただただ呆然とする家族の表情が印象的であった。死んだ後の魂の行方についての「物語」を知らない多くの遺族は，ボランティアのお坊さんの執り行う葬式や読経にただ縋ることしかできなかった。[5]

医学者の養老孟司は，対談集の中で，池上彰から都会で死を間近に見る機会が減っていることを問われて，次のように答えている。[6]

> 見えなくなっているというより，日常生活に死はあってはならないものになっている。でも，それは異常です。なにしろ人間の致死率は100%なんですから。それなのに，「自分が死んだ時どうする」って慌てる。
> 葬式という慣習が長年続いてきたのは，それなりの知恵が働いてきたからです。そこを安直に考え過ぎているのではないでしょうか。
> 宗教を必要としなかった時代はないんじゃないでしょうか，今回の地震でもわかる通り，死は究極の不条理です。その受け容れ方を，宗教は担ってきた。「安心立命」とよくいいますけれど，年をとると必ず宗教に戻っていく。ただ世のなかすべてが意識中心主義になってしまった現代では，死が人間に左右できない自然現象だということが忘れられてしまう。

前述したように，宗教には２つの側面がある。１つ目は身体の健康を保つための医学な教義や他者とのコミュニケーションを円滑にするための倫理的な規範である。ただし，こうした側面は医療体制の普及や，学校教育などで十分に補えることができる。[7]

もう１つの側面は，仏教でいうところの四苦（生まれること，老いること，病むこと，死ぬことの四つの苦）に対する究極的な悩みである。宗教は答えようのない問題に対して神や仏の概念を用いてうまく説明してくれる。また，死という大きな問題に対しても，死後の世界観の提示や葬式・儀礼によって，残された家族の腑に落ちる仕組みを持っている。養老孟司の「死は究極の不条理です。その受け容れ方を，宗教は担ってきた」という言葉にあるように，宗教の持つこうした側面は，今後ともなくならないであろう。

文字数：1873字

＜引用・参考文献＞

---

[1] 中村圭志『はじめての〈宗教〉入門』河出書房新社，2023，pp.155-157参考
[2] ドーリング・キンダースリー『目で見る宗教：何を目ざして生きるのか？』さ・え・ら書房，2011，pp.20-21参考
[3] 酒井雄哉・池上彰『この世で大切なものってなんですか？』（朝日新書304），朝日新聞出版社，2011，pp.171-172
[4] 森達也『神さまってなに？』河出書房新社，2009，pp.19-20

[5] 君塚良一脚本・監督『遺体　明日への１０日間』西田敏行主演，ファントム・フィルム，2013，（DVD）.
[6] 池上彰『池上彰の宗教がわかれば世界が見える』文藝春秋，2011，pp.244-246
[7] 島田裕巳『なぜ人は宗教にハマるのか』河出書房新社，2010，pp.61-63 参考